

校内別室指導支援員の取組を活かした不登校支援について

不登校児童・生徒の状況

- ・学校や関連機関などになかなか関わることができない児童が2名在籍している。
- ・その日の状況等によっては、直接教室に向かうことは難しいが、校内別室登校であれば登校してみようと思える児童が複数名いる。
- ・そのうちの数名は、校内別室で落ち着いた後、学級教室に向かうことができている。

具体的な取組

【事例 1】

《仲間づくりを通して一歩前進》

- ・校内別室に集まる児童間で、少しずつ交友関係が築かれ、互いに良い刺激を与えることがあった。生徒一人一人の目標や苦手・得意なことも違うため交流を通して、多様性の理解にもつながっている。

【事例 2】

《自分の気持ちと相談して少し挑戦》

- ・校内別室指導支援員との良好な関係ができたことにより、「今日の自分の状況」を伝え合うことで、「その状況の中でどこまで挑戦できそうか」という前向きな考えをもち、実際に行動に移せる場面を設定できるようになった。

【事例 3】

《保護者との相談・工夫》

- ・校内別室指導支援員が中心になって、保護者と面談を計画し、話し合う内容などの調整を行い、手厚い保護者対応、保護者から児童の様子の情報共有が可能となり、その内容が校内で共有されるようになった。

【事例 4】

《SSW と十分な連携》

- ・スクールソーシャルワーカー（SSW）と十分な情報共有を行い、少しだけ登校刺激を与えることによって、継続した登校の可能性がある児童については、SSW の協力を得て、校内別室登校が持続できている。



成果

- ・一人一人の児童が、自分なりの目標を立て、少しずつ挑戦する気持ちをもてるようになった。
- ・教員が保護者の話を傾聴し、一緒に考えたり、新たな取組を試したりするなど、児童の気持ちを大切に保護者と足並みをそろえ動けるようになった。

課題

- ・非常に効果があり、子供たちのためになっているが、子供たちのニーズに対して支援員の数の増員が今後の課題となる。

別室（ほっとスペース）の開室について

不登校児童・生徒の状況

「だれでも・いつでも・何度でも」利用できる居場所とした。不登校状況が長期化した生徒、学習意欲はあるが教室への入室が難しいために校内別室で学習をする生徒、登校したものの教室での活動に難しさや不安を感じた生徒が、「ほっと」でき、安心できる居場所で自分のペースに合わせた自習や学校生活を過ごしている。

具体的な取組

別室指導の校内体制作り

本校では令和5年度の2学期より校内別室指導支援員が配置された。不登校担当で校内別室指導の利用方法や教職員、生徒、保護者への周知の仕方を検討し、校内別室指導を開始している。



不登校の生徒が別室で個別学習

当該生徒は、教室に入室が難しいが週に一度のスクールカウンセラー（SC）との面談にいられていた。学習への意欲があり、SCとの面談日に合わせて少しずつ学習をスタートした。自分の学習したい教科を自分に合わせたペースで、校内別室指導支援員に見守られながら学習している。

集団活動が苦手な生徒

登校できる日もあるが集団活動に負担を感じてしまい反動で休みが続くことが多い。校内別室で自分のペースで学習を進めることにしてから、週4回、2時間ずつ校内別室での学習をスタートした。自分でその日の学習内容を決め、取り組んでいる。

休息のための利用（予防的利用）

集団で過ごすことが苦手な生徒や、今、教室にいるのが難しい、気持ちが落ち着かないといった生徒が、気持ちを整えるために校内別室で過ごしている。数時間過ごして教室に戻ることもある。気持ちが回復できない場合は早退することもある。

成果

週1回 SCに通っている学習意欲のある生徒に関しては校内別室での学習を通じて学校で過ごす時間や人と関わる時間が長くなった。集団が苦手な生徒にとっては校内別室では自分のペースで落ち着いて過ごせるため登校の心理的負担が減った様子である。利用している生徒の、早退回数が減ったケースもある。

課題

複数人での利用がしやすいように、パーテーションを用意するなど個に応じた支援をするための環境整備をすすめたい。

オンラインを利用した別室対応について

不登校児童・生徒の状況

- 当該生徒 1 コミュニケーション能力が低く、教室における集団での授業が難しい。
 当該生徒 2 頭痛を訴え、欠席や遅刻を繰り返していた。学習に取り組む力不足。
 当該生徒 3 5教科の授業は受けたくないとはっきり決めている。欠席が多い。
 当該生徒 4 固定の利用者ではなく、単発的に校内別室で学習したい。

具体的な取組

教室の授業をオンライン配信し、それを校内別室で受けている。また、学校から出された課題などを自分の状況に合わせて学習に取り組んでいる。支援員・副校長・担任・養護教諭・スクールカウンセラー（SC）が定期的に面談などで関係をもち、コミュニケーションをとっている。

登校後、体調不良から保健室をよく利用していたが、校内別室にうまく移行できた。自分のペースで、休憩をとりながら、主に学校からの課題に取り組んでいる。集団での授業は苦痛だが、自分のペースでやるべきことを考え、取り組むことができている。SCとの面談を継続して行っている。

5教科の授業の時は、校内別室を利用している。その際、自分で利用する時間を決めて学習に取り組んでいる。別室でも5教科の学習には取り組めていないが、登校することを目標にして頑張っている生徒もいる。コミュニケーションは、自分から取ることができ、自分の主張がはっきりできるため、本人の意思を尊重して必要な支援をしている。

特定の教科にどうしても教室で学習することが難しくなった生徒が担任の許可を得て利用する。自分で持ってきた学習課題に取り組むことが多い。友人関係のトラブルで教室にいることが苦痛な時間や、校内別室で静かに学習した生徒が利用している。継続的な心理支援が必要な場合は、他の教員で行う。



成果

全員ではないが、長期欠席している生徒が登校して、校内別室での学習が可能になったことで、出席日数が増加した。また、生徒と関われる時間が確保でき、当該生徒のペースで学習が進められるようになった。

課題

保護者からの理解が得られない場合は、当該生徒への支援の対応ができない。また、利用者が増えた場合は、1人の校内別室指導支援員では対応しきれない。

欠席しがちな生徒への支援について

不登校生徒の状況

当該生徒は、小学校在籍時から不登校が継続していたり、なかなか体調や気持ちが整わずに登校できなかつたりと状況は様々である。また、学校生活の状況も様々で、登校はできるが教室に入れない生徒や、学校に登校したい気持ちはあるが心身の調子が整わない生徒、昼夜逆転の生活になってしまっている生徒、登校の意欲が低い生徒など一人一人異なる課題を抱えている。

具体的な取組

長期的に欠席している生徒の対応(関係づくり・学習指導など)に向けて、学級担任と該当生徒との関わり方や関係づくりに向けた打合せを行うなどして、それぞれの生徒の状況にあった対応を進めていく。また、学校に登校することはできたが、参加できる教科と苦手な教科があり、参加できる教科が限定されている生徒がいた場合、学年の教員と連携をとり状況に応じて校内別室で学習支援を行う。

教育支援センター、子供家庭支援センター、児童相談所などの外部機関等と連携して、学校に登校することが難しい生徒を外部機関とつなげ、外部機関に関わっている生徒のうち、別室であれば登校できそうな生徒がいれば働きかけを行うなど組織的に行う。

校内委員会を定期的で開催し、不登校生徒の現状把握に努め、サポート方法などについて担当教員と情報を共有し組織的に対応する。また、必要に応じて関係生徒に校内別室支援の情報提供と普及啓発に努める。



別室を不登校生徒が登校しやすいような場所に設定するなど、別室環境を可能な範囲で、複数名の生徒が登校しても対応できるよう、学校全体で連携して校内別室環境を整える。

成果

当該生徒にとっては、登校へのハードルが低くなったり、障壁の数が減ったり校内別室の取組によって、「学校へ行ってみようかな」という前向きな気持ちになる生徒が出てきている。また、教員にとっても校務の時間に余裕をもつことができ、当該生徒の対応ができ、負担軽減につながっている。

課題

今後は、保護者や不登校担当教員、スクールカウンセラーなどと連携を深め、本人が安心して生活できる居場所づくりや生徒支援を行っていく。また、校内別室支援の活用に関するルール等を整備していく。